

懐かしい年への手紙

——映画文学人生論

原作：大江健三郎（1987年）

参考：『飼育』（1958）

『万延元年のフットボール』（1967年）

『読む人間 読書講義』（2007年）

ダンテ『神曲』地獄篇 煉獄篇 天国篇

谷間の村に戻り、毎日おもにダンテを読む

パソコンの普及で文学が変わった。誰もがキーボードをたたいて作品を発表できるようになったからだが、アマチュアのレベルではない純文学の最前線でも変化が生じたといわれる。

変わり目の年は一九八七年。村上春樹の『ノルウェイの森』がベストセラーとして大江健三郎の『懐かしい年への手紙』を圧倒した。大きい書店で平積みされているのが『ノルウェイの森』で、「私の本はその奥から恥ずかしそうにこちらを見ていた（笑）」と大江自身が率直にみとめ、純文学の世界での世代交代を印象づけた。

ところが、六年後の一九九四年に大江健三郎はノーベル文学賞を受賞する。対象作品は『万延元年のフットボール』（一九六七）だった。『懐かしい年への手紙』（一九八七年）ではない。

懐かしい年とはいっただろう。万延元年（1860）ではなく、大江が純文学の『万延元年のフットボール』を発表した昭和四十二年（1967）だと思う。

『懐かしい年への手紙』の作者Kは作中人物のギー兄さんからもらった資料で『万延元年のフットボール』を書いたと知っているし、その内容や書評について二人であれこれ語り合っている。

ギー兄さんはKよりも五歳年上で、英語を教えにくれたインテリだが、安保闘争の際に頭を殴打されて重傷を負い、別件の殺人容疑では十年間、獄中生活を送ったこともある。谷間に戻ってから

懐かしい年への 手紙

映画文学人生論



は、毎日おもにダンテを読むような暮らしをするという日本人離れした人物だ。

昭和三十年代の書店では世界文学全集がずらりと書棚にならんでいたと私も記憶している。『神曲』はその代表的存在であり、西洋文学の最高峰と目されていた。ただし、ギリシアやラテンの古典の素養がないと理解できそうもない。

ギー兄さんのように村の森林組合に勤めながら『神曲』を読むような知識人はめったにいないとが、兄さんはそんな例外的知識人だ。

『懐かしい年への手紙』の二十年後の二〇〇七年、こんどは大江健三郎『読む人間 読書講義』が公開された。講義には『万延元年のフットボール』や『懐かしい手紙』だけでなく、『神曲』の読み方へのヒントもふくまれている。村上春樹の『ノルウェイの森』への言及もある。みんなつながっているのだ。

つながっている書物をぜんぶ読めば、大江健三郎の文学をもっと理解できると思うが、私の読書力ではとても及ばない。日暮れて道遠し。

『神曲』を読んで、理解しているといっても、大江健三郎はキリスト教を信仰しているわけではない。死後に天国へ召される希望はなく、煉獄へ行くしかない運命の人だ。それでも、彼は祈っている。「信仰を持たない者の祈り」を。

門松は冥土の旅の一里塚 一休宗純